

居住環境がウェイトピッカーの生活行動に及ぼす影響
—フィリピン共和国イロイロ市のカラフナン最終処分場を例に—

47-146772 篠田景子

指導教員 堀田昌英教授

キーワード：ウェイトピッカー、インフォーマル・セクター、廃棄物管理、カラフナン

1. 研究背景

途上国においては正社員モデルの安定した雇用契約を持たない労働者が多く、こうした就業形態にある人々はインフォーマル・セクターと呼ばれている。その代表格であるのが全世界に2,000万人以上いるといわれるウェイトピッカーであり、彼らは野積み式処分場（オープンダンプ）などに廃棄されたごみの中から拾い集めた有価物を売却することによって生計を立てている。ウェイトピッキングは多くの国で規制の対象となっており、フィリピン共和国では2001年に廃棄物管理・処理対策を講じた生態的固形廃棄物管理法（RA9003）が制定され、その中で初めて同国内の処分場におけるウェイトピッキングを禁止する内容が盛り込まれた。そこで幾瀬（2014）は、イロイロ市に位置する、近いうちに閉鎖されることが決まっているカラフナン最終処分場のウェイトピッカーを対象にウェイトピッキングに代わる代替的生計手段を受け入れる際の決定要因は何かについて社会実験を行い検討した。その結果、ウェイトピッカーにとってウェイトピッキングは単なる収入源というだけでなく生活のために必要不可欠な貯蓄等の役割も果たしていることが明らかになった。続いて田村（2015）は代替生計手段の提供が困難であることを踏まえ、ウェイトピッカーをフォーマルな廃棄物管理セクターに取り入れることを提案した。そのためにまずウェイトピッカーの実態を明らかにすることが重要だとし、彼らの人間関係が収入や有価物の拾得量といったものに影響を与えていることを明らかにした。

2. 研究目的と仮説

前述のようにカラフナン最終処分場の閉鎖は決定されているものの、そこで働くウェイトピッカーへの今後の対策はいまだはっきりしていない。政策策定の際に重要であるのは彼らについてどれほどの情報が蓄積されているかであると考え、本研究はウェイトピッカーの実情をより深く理解するために、どのような環境の中で暮らし、どのように生活行動を決定しているのかを知ることを目的とする。そこで、近隣に住む者同士は相互扶助の結果関係が密になり、その結果同じような行動選択をする傾向が生まれるとの仮説を立てた。

3. 研究方法

フィリピン共和国・イロイロ市に位置するカラフナン最終処分場で2015年8月31日から9月25日にかけてフィールド調査を実施した。

1) インタビュー調査

処分場周辺に居住するすべての者を対象にインタビューを行い208世帯1,029人分の基本属性や近隣住民との関係等のデータを取得。そのうちウェイトピッカーを包含するのは155世帯であった。

2) 住居の位置情報と距離によるクラスター分け
インタビュー調査と並行して、GPS機を用いて人々の住居の位置情報を取得した。そこから、ウェイトピッカーを含む155の世帯を距離によって15のグループに非階層的クラスター分析によって割り振った。グループ間で生活行動に特徴や傾向があるかどうかを見るのが目的である。

4. 研究結果

インタビューによって得た情報をクラスター分析によって振り分けた 15 グループごとにあてはめ分析・考察を行った。まず、グループ間の違いについては、世帯の居住年数平均が長いグループ、世帯収入平均が高いグループ、他の地域から転入してきた世帯の割合が高いグループなど、グループごとに多少の傾向は見られた。しかし、収入の差や転入者の割合といったものは微々たる差であり、収入の低い世帯や転入世帯はまんべんなく分散していた。

居住地が近い世帯間では、住民組織への加入や有価物売却先ジャンクショップの選好といった生活行動の選択が似通ってくるとの仮説をもとに検証を進めたが、有力な分析結果は得られなかった。ウェイストピッカーにとってきわめて重要であるジャンクショップの選択においては、融資関係を含めたスキ関係または距離が最重要視される。

加えて、カラフナン最終処分場に居住するウェイストピッカー間に共同体が存在するかについて、富永（1995）が「社会」を定義するのに用いた 4 つの条件を本研究における「共同体」の定義として援用し検証した。その結果、強い排他性を持たない共同体があると結論づけることができた。

5. 結論と今後の課題

本研究では、住居間の距離を指標にグループ分けを行ったが、それよりもこの一帯が 1 つの共同体を構成していると考えの方がより実態に即している。しかしそれは強い排他性を持ったものではなく、それは様々な地域から移住してきた世帯が処分場周辺に点在しており、元から住んでいた世帯との収入の差も小さく、住民組織加入などをめぐる分断も観察されなかったことからもうかがうことができる。

また、カラフナン最終処分場周辺に居住するウェイストピッカー間に共同体が存在していると結論づけたが、それからさらにもう 1 歩踏み込むこ

とはできなかった。例えば、共同体の中では人々の間に行動規範や役割分担があると考えられるが、そこまで明らかにすることはできなかった。また、共同体の中で共有される資源等へのアクセスの有無の差や、それが生まれる原因の検証も今後の課題として残った。

6. 主要参考文献

- 幾瀬真希（2014）「社会実験を通じたウェイスト・ピッカーへの代替的な生計手段提供条件の検討～フィリピン共和国イロイロ市を例に～」東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻修士論文（未公開）
- 田村響（2015）「Waste Pickers を取り巻く有価物取引市場の分析及び、社会ネットワークが有価物回収活動に与える影響～フィリピン共和国イロイロ市カラフナン最終処分施設を事例として～」東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻修士論文（未公開）
- 富永健一（1995）『社会学講義一人と社会の学』中公新書

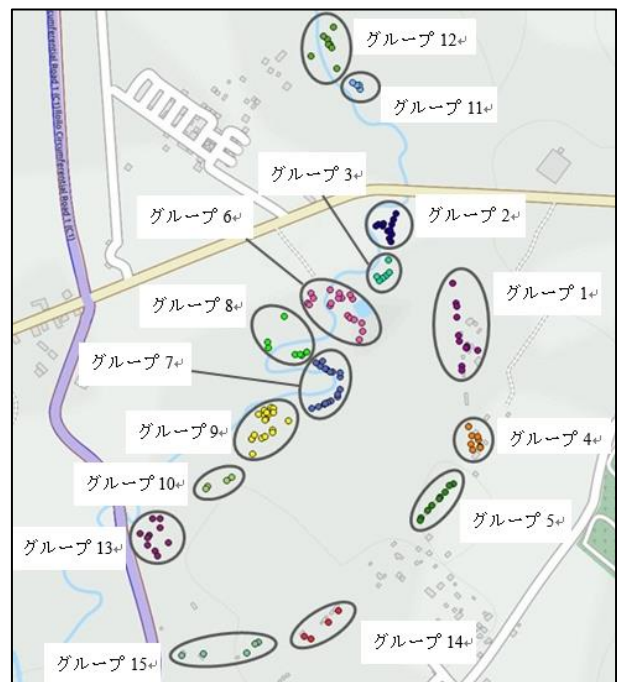


図 クラスタ分析後の 15 グループ